

第一部

	はしがき	3
1	メディアはメッセージである	7
2	熱いメディアと冷たいメディア	23
3	過熱されたメディアの逆転	35
4	メカ好き 感覚麻痺を起こしたナルキッソス	43
5	雑種のエネルギー 危険な関係	50
6	転換子としてのメディア	59
7	挑戦と崩壊 創造性の報復	65

第二部

8	話されることば 悪の華?	79
9	書かれたことば 耳には目を	83
10	道路と紙のルート	91
11	数 群衆のプロファイル	107
12	衣服 皮膚の拡張	120
13	住宅 新しい外観と新しい展望	124

14	貨幣 貧乏人のクレジット・カード	132
15	時計 時のかおり	146
16	印刷 それをどう捉えるか	159
17	漫画 『マッド』——テレビへの気遣いとみた握えの間	166
18	印刷されたことば ナショナリズムの設計主	173
19	車輪、自転車、飛行機	183
20	写真 壁のない売春宿	192
21	新聞 ニュース漏洩による政治	207
22	自動車 機械の花嫁	222
23	広告 お隣りに負けずに大騒ぎ	231
24	ゲーム 人間の拡張	239
25	電信 社会のホルモン	252
26	タイプライター 鉄のきまぐれの時代へ	264
27	電話 咆哮する金管か、チリンと鳴る象徴か	273
28	蓄音機 国民の肺を縮ませた玩具	283
29	映画 リールの世界	293
30	ラジオ 部族の太鼓	308
31	テレビ 臆病な巨人	320
32	兵器 図像の戦い	354

的であつたのにならして、オートメーションは深層的、統合的、分散的である。

これにかんしては、電気の光を例にとれば、よく分かるであらう。電気の光というのは純粋なインフォメーションである。それがなにか宣伝文句や名前を描き出すのに使われないかぎり、いわば、メッセージをもたないメディアである。この事実はすべてのメディアの特徴であるけれども、その意味するところは、どんなメディアでもその「内容」はつねに別のメディアである、ということだ。書きことばの内容は話しことばであり、印刷されたことばの内容は書かれたことばであり、印刷は電信の内容である。もし「話しことばの内容はなにか」と問われたら、「実際の思考のプロセスで、それ自体は非言語的なもの」ということにならざるをえない。抽象絵画は創造的思考のプロセスの直接の現われを再現する。そういう思考はコンピューター・デザインにも現われるかもしれないところだ。しかしながら、いまここで考察しているのは、既存のプロセスを拡充したり加速したりするときの、デザインあるいはパターンが、心理的および社会的にどのような結果を生むか、ということだ。なぜなら、いかなるメディア（つまり、技術）の場合でも、その「メッセージ」は、それが人間の世界に導入するスケール、ペース、パターンの変化に他ならないからである。鉄道は移動とか輸送とか車輪とか線路とかを人間の社会に導入したのではない。それ以前の人間の機能のスケールを加速拡大し、その結果まったく新しい種類の都市や新しい種類の労働や余暇を生み出したのである。このことは、鉄道の通ずるようになったのが熱帯地方であれ北方地方であれ、また、鉄道というメディアの荷物（すなわち、内容）と無関係に、生じた。一方、飛行機も輸送の度合いを加速することで、飛行機の使用目的とはまったく無関係に、鉄道型の都市や政治や結合を解体する傾向がある。

電気の光に戻ることにならう。光が脳手術に用いられようが、ナイターに用いられようが、そんなことはどうでもいい問題である。このような活動はある意味で電気の光の「内容」ではないか、という主張もできるかもしれない。電気の光がなければ存在できないからだ。けれども、この事実は「メディアはメッセージである」という要点を強調しているに他ならない。人間の結合と行動の尺度と形態を形成し、統制するのがメディアに他ならないからである。このようなメディアの内容あるいは効用はさまざまであるが、人間の結合の形態を形成する上では実効がない。実を

言えば、メディアの内容がメディアの性格にたいしてわれわれを盲目にするということが、あまりにもしばしばありすぎるのだ。現代になつてはじめて、種々の工業はそれ自身が遂行しているさまざまな業務に気づくにいたつた。IBMが事務用品あるいは事務機器の製造をしているのでなく、情報の加工をしていることに気づいたとき、IBMは明確なビジョンをもつて航行を始めたのであつた。ジェネラル・エレクトリック・カンパニーはその利益のかなりの部分を電球と電気設備の製造から上げている。けれども、この会社はそれが情報を移動させる仕事をしていることにまだ気づいていない。アメリカ電信電話会社と同じである。

電気の光はそれに「内容」がないがゆえに、コミュニケーションのメディアとして注意されることがない。そして、このために、それは人びとがいかにメディアの研究をしにくいかを示す貴重な例となつている。電気の光はそれがなにか商品名を描き出すのに用いられるまで、メディアであることが気づかれないからである。その場合、気づかれるのは光そのものでなく、その「内容」（すなわち、実際には別のメディアなるもの）である。電気の光のメッセージは工業における電気の力のメッセージに似て、まったく根源的で、浸透的で、拡散的である。電気の光および力はその用途から分離されてもお、人間の結合において時間と空間という要因を駆逐するところ、ラジオ、電信、電話、テレビがまさしくやっているとおりで、深層での関与を引き起こすからだ。

人間の拡張を研究するための、ますますの手引きを作らうとするなら、シェイクスピアから抜粋したらすんでしまふ。「ロミオとジュリエット」から引いた、つぎのおなじみの詩行で、シェイクスピアはテレビのことを言つていたのではない。そこじつづける人が出てくるかもしれない。

だが、しつ、あの窓から洩れる光はなんだ。

なにか話している。けれどもなにも言っていない。（原文で、三行目は「あちらは」）

『オセロー』は『リア王』と同じで、幻想によつて変わってしまった人びとの苦悶を扱っているが、そこにこゝろの詩行がある。これによつて、新しいメディアにももの姿を変えてしまう力があることをシェイクスピアが直観してい

たことが分かる。

魔法の薬でもあるのではないか、
それを使えば、若い乙女の本性が犯されて
しまうような。ロデリーゴ、お前は読んだことがないか、
なにかそのようなことについて。 (『オセロー』一幕一場)

シェイクスピアの『トロイラスとクレシダ』は、ほとんど全曲コミュニケーションについての心理的ならびに社会的な研究にあてられている。そのなかで、シェイクスピアは、社会のおよび政治的な航行がまともなものになるには革新の結果を予測できるかどうかによる、という事実気づいていることを表明している。

用心深さが目を光らせた状態にあると、
地底の王ブルータスの黄金のほとんど一粒一粒まで知り、
測り知れない深みの底を見つめ、
思想の位置をつきとめ、ほとんど神のごとくに
揺籃のなかで眠りこんでいる思想のヴェールをはぐ。 (『トロイラスとクレシダ』三幕三場)

メディアの「内容」あるいはプログラムの組み方とは別個に、メディアの生態についての自覚が高まっていることは、つぎの困惑しきった無名の詩人の詩句に示されていた。

現代の考え方では、(事実というのではないが)
行動しないものなどありはしない。
だから、かゆみについてでなく、掻き方について
述べるのが知恵だと見なされる。

なぜメディアが社会的にはメッセージなのか。同じように全体的な配置を認識して、このことを明らかにしているのが、もつとも最近の過激な医学理論に起こっている。ハンス・セリエは『生命のストレス』のなかで、自分の理論を聞かされて同僚が肝をつぶしたことを書いている。

あれやこれやの不純で有毒な物質で処理した動物について、わたくしが観察したところを、さらに得意になって説明しにかかると、かれはなんとも悲しげな目でわたくしを見て、明らかに絶望的な調子で言った。「だがね、セリエ、手遅れにならないうちに、自分のやっていることを知るようになくちや。きみが一生をこみの薬学の研究に費やそうと決めたなんて。」

セリエは病気の「ストレス」理論のなかで環境状況の全体を扱っているが、ちょうど同じように、最近のメディア研究の方法もまた、「内容」だけでなく、メディアと特定のメディアが作用する文化的マトリックスをも考える。以前はメディアの心理的および社会的効果に気づいていなかったが、このことはこれまでのほとんどどんな発言からも例証できる。

デイヴィッド・サーノフ將軍がノートル・ダム大学から名誉学位を数年前に受けたとき、つぎのようなことを言った。「われわれは技術の生み出した道具を非難して、それを振るう人の罪を忘れる傾向がある。現代科学の産物はそれ自体でいいとかわるいとかいうものではない。その価値を決めるのはその用い方だ。」これは現代の夢遊病患者の意見である。こんなふうに言ってみたらどうか。「アップル・パイそれ自体はいいとかわるいとかいうものではない。その価値を決めるのはその用い方だ」とか「天然痘それ自体はいいとかわるいとかいうものではない。その価値を決めるのはその用い方だ」とか。もう一つ、「銃器それ自体はいいとかわるいとかいうものではない。その価値を決めるのはその用い方だ」と。つまり弾丸がお目当ての人間に当たれば、銃器はいいものというわけだ。ブラウン管が弾丸をお目当ての人間に届かせれば、それはいいものというわけだ。わたくしは屁理屈を言っているのではない。サーノフの発言にはなんら精密に検討するに値するものなどありはしない。新しい技術形態のなかで自分自身が切断され拡張されていることにいい気持ちになっているナルキッソスといった体で、メディア、いつさいのメディアの本質

社会は、それらの産物を社会の紐帯として受け入れるからだ。大都市が新聞をそういうものとして受け入れるのと、だいたい同じである。綿花や石油が、ちょうどラジオやテレビのように、共同体の全精神生活に課せられた「基本料金」となる。こういうふうに浸透するから、どの社会にも独特の香りが生まれる。社会はその生命を形成する産物のそれぞれに鼻やその他の感覚を通じて支払いをするのである。

すべてのメディアが人間の感覚の拡張であるが、同時に、それは個人のエネルギーに課せられた「基本料金」でもある。それはわれわれ一人一人の意識と経験をまとめあげる。このことは、言っている文脈は違っているが、心理学者のC・G・ユングが言っていることのなかにも認められる。

ローマ人はだれもが奴隷に囲まれていた。奴隷とその心理が古代のイタリアに氾濫していた。そして、ローマ人はだれもが、心のなかで、もちろん無意識にだが、奴隷となった。たえず奴隷の雰囲気の中に生きていたから、無意識を通じて奴隷の心理に冒されたのであった。このような影響から自己を防御できる人などいなかった。(『分析心理学論集』ロンドン、一九二八年)

2 熱いメディアと冷たいメディア

クルト・ザックスは『世界の舞踊史』¹⁸²のなかでこう説明している。「ワルツの興隆は真理、単純、自然、原始といったものへのあこがれの産物であり、それは十八世紀のあとの三分の二の時代に充足されたものであった」と。ジャズの時代になると、ワルツが熱い外爆発の人間的表現として出現し、宮廷風で合唱曲風の舞踊形式のもつ封建制の障壁を打破した事実を見逃しがちである。

ラジオのような「熱い」(hot)メディアと電話のような「冷たい」(cool)メディア、映画のような熱いメディアとテレビのような冷たいメディア、これを区別する基本原理がある。熱いメディアとは単一の感覚を「高精細度」(high definition)で拡張するメディアのことである。「高精細度」とはデータを十分に満たされた状態のことだ。写真は視覚的に「高精細度」である。漫画が「低精細度」(low definition)なのは、視覚情報があまり与えられていないからだ。電話が冷たいメディア、すなわち「低精細度」のメディアの一つであるのは、耳に与えられる情報量が乏しいからだ。さらに、話されることばが「低精細度」の冷たいメディアであるのは、与えられる情報量が少なく、聞き手がたくさん補わなければならないからだ。一方、熱いメディアは受容者によって補充ないし補完されるところがあまりない。したがって、熱いメディアは受容者による参与性が低く、冷たいメディアは参与性あるいは補完性が高い。だからこそ、当然のことであるが、ラジオはたとえば電話のような冷たいメディアと違った効果を利用者に与える。

象形文字あるいは表意文字のような冷たいメディアは表音アルファベットのような熱くて外爆発を起こすメディアと非常に異なった効果をもっている。アルファベットが抽象的で視覚的な度合いを非常に強められたとき、活字となった。印刷されたことは専門分化性が強烈で、中世的で集団的な座や修道院の絆を打破して、投企と独占というきわめて個人主義的なパターンを生み出した。けれども、典型的な反転が起こったのは、極端な独占が人びとの生活の上に非個人的な帝国を築くことで集団性を呼び戻してしまったときであった。書きことばというメディアを強烈に熱くして反復可能な印刷にまでしてしまおうと、国家主義を生み、十六世紀の宗教戦争を生むことになるのであった。石のような重くて振りまわしにくいメディアは時間を束ねるものである。ものを書くのに用いれば、たしかに石は非常に冷たいメディアであって、縦に時間を結び合わせるのに役立つ（その耐久性ゆえに）。それにたいして、紙は熱いメディアであって、政治の帝国においても娯楽の帝国においても、横に空間を結び合わせるのに役立つ（その軽便性ゆえに）。

熱いメディアはどれも冷たいメディアより人の参与を許さない。だから、講義は演習より、書物は対談より、参与する余地がない。印刷が出現するとともに、それ以前の多くのメディアが人生と芸術から排除されて、その多くが異様な新しい強烈さを帯びることになった。けれども、われわれの時代には、熱い形式は排除し、冷たい形式は包含するという原理の例がいくらかもある。一世紀前、バレリーナがつま先立ちして踊ることを始めたとき、それはバレエという芸術が新しい「精神性」を獲得したと感じられた。この新しい強烈さが感じられるに及んで、男性はバレエから排除されることになった。工業の専門分化が始まり、家庭で果たしていた機能が外爆発を起こして、共同体の周辺に洗濯屋やパン屋や病院ができるとともに、女性の役割もまた細分化していった。強烈さあるいは高精細度は、娯楽においても生活においても専門化と細分化を生み出す。だからこそ、どのような強烈な経験もそれが「学習」あるいは「同化」されるためには、その前に「忘却」され「検閲」され、非常に冷たい状態にされなければならないのだ。フロイト流の「検閲」は道徳的機能をもつものというより、学習のために不可欠の条件なのである。もしわれわれの多様な知覚の構造に加えられた衝撃をすべて完全かつ直接に受けとめるとすれば、われわれはじきにノイローゼにか

かって、はつとしてはいつも警報ボタンを押すことになってしまふ。「検閲」というものは、経験の襲来を大部分ただ冷却させることでわれわれの生理的な神経組織を防衛してくれるように、われわれの価値の中核組織をも防衛してくれる。多くの人たちにとって、この冷却装置は生涯を通じて一種の精神の死後硬直、あるいは夢遊症状を引き起こす。新しい技術が展開してきたときに、とくに見られる現象である。

冷たい技術のあとに熱い技術が続いて破壊的な衝撃を与える例を、ロバート・シオボールドが『言める者と負しき者』のなかであげている。オーストラリアの現地人に宣教師が鋼鉄の斧を与えたら、石の斧の上に築かれていたその文化が崩壊してしまったというのだ。石の斧は数が少ないばかりか、いつも男性の優位を示すステイタス・シンボルであった。宣教師はたくさんの鋭い鋼鉄の斧を持ってきて、それを女や子どもに与えたのであった。すると、男はそれを女から借りることさえした。それで男の威信が崩壊したのであった。伝統的な部族的で封建的なヒエラルキーが機械的な画一的で反復的なメディアに出会うと、すぐにも崩壊してしまう。貨幣、車輪、文字、そのほか交換や情報の速度を大きくするようなメディアは、すべて、部族の構造を細分化するのに力を貸す。同じようにして、電気とともにはるかに大きな加速が生ずると、強烈に人を巻きこむ部族のパターンを回復するのに力を貸すことになるかもしれない。ヨーロッパにラジオが普及したときに起こったものであり、いまアメリカにテレビが普及した結果として起こりつつあるものである。

専門分化を促す技術は部族を解体する。専門分化を促さない電気技術はふたたび部族を生み出す。新しい技術が行き渡り、結果として混乱の過程が生じ、そのあとにたいへんな文化の停滞が来る。人びとはそのとき新しい状況をあたかも古い状況のごとくに眺めないわけにいかない感じで、「内爆発」の時代に「人口の外爆発」という考え方で対処する。ニュートンは時計の時代にあつて、物理的宇宙を時計のイメージで提示しようと努力した。しかし、ブレイクのような詩人は時計の挑戦にたいする反応ではニュートンよりはるかに先を行っていた。ブレイクは「単一のヴィジョンとニュートンの眠り」から解放されることが必要であると言った。新しい機械類からの挑戦にたいするニュートンの反応では、それ自体、挑戦を機械的に反復しているにすぎないことをよく知っていたからであった。ブレイ